G20諸宗教フォーラム2019京都

「寛容と相互尊重」をG20サミットへ

清水寺で宣言文発表

気候変動やAI 少子高齢化など　8課題の討議盛り込む

今月下旬に大阪で開かれるG20サミットに向け、世界各国の宗教指導者らが教派と国を超えて京都市に集い、現代社会の課題について経済成長とは異なる視点から意見を交わした「G20諸宗教フォーラム2019京都」が12日、閉会した。2日間で議論した8課題に対する提言をまとめた宣言文を採択し、東山区の清水寺で発表した。宣言文は14日、G20サミットに臨む日本政府に届けられた。

出席者約70人と一般参拝者が集まった西門前で、伊奈波神社（岐阜市）の上杉千文宮司が日本語で、京都精華大のウスビ・サコ学長が英語で読み上げた。宣言文では主要国の指導者に対し、「自国の利益を尊重するだけでなく、地球全体を俯瞰する視座から、指導力を正しく発揮できることを望む」と要請。国益優先の傾向が加速すれば、「行き着く先は国家間の対立と衝突」と指摘した上で、「寛容と相互尊重の立場に立って、協調路線を取ることを望む」と主張している。

さらに、核軍縮に向けた努力がある一方で、東アジアは弾道ミサイルの脅威にさらされていると注意を喚起し、「唯一の戦争被爆国日本において開催されるG20首脳会議では、核兵器及び弾道ミサイルの廃絶へ向けて明確な意思を示すことを強く望む」としている。

一般参拝者も見守る中で宣言文を読み上げた

宣言文発表前には、大阪府仏教青年会の寺本憲生会長や村山博雅氏ら8人が読経したほか、インターハイに出場する一燈園高少林寺拳法部の6人が演武を披露。平和の祈りを込め、出席者全員が梵鐘の音を響かせた。

8課題を議論

テーマに挙がったのは、①持続可能な成長に向けた世界的枠組み「グローバル・コンパクト」、②「気候変動」、③「AIの脅威と人間の責任」、④自然災害などの危機に対する回復力ある「レジリエント社会」、⑤「生命科学と宗教」、⑥「抑圧された人々と共に生きること」、⑦「少子高齢化」、⑧「格差社会と貧困」―の8課題。

「生命科学と宗教」を話し合った部会は12日、下京区のキャンパスプラザ京都で開かれ、フォーラム運営委員長を務めた三宅善信・金光教泉尾教会総長らパネリスト4人が登壇した。

大西龍心・高野山真言宗観音院住職は、元農水省事務次官が息子を殺害した事件に言及し、「息子を自分の所有物だと考えたのではないか」との疑念を示した上で、出生前診断による堕胎や遺伝子操作による「試験管ベビー」など科学の発展で生じた問題を挙げ、「宗教が科学の方向性を決めることは難しいが、こうした問題に直面した人の心を見つめることはできる。人々の心を変えることで科学の行方を変えることはできるのでは」と話した。

舞台演出家でフォーラムのデザイン演出を担当した月ヶ瀬悠次郎氏は、中国の「臓器狩り」をめぐり、「どこまでが悪なのか線引きできるのか」とジレンマを提示し、「誰が悪いのか見つけることで必ずしも決着しない。こうした選択肢が与えられない方法を考えることが大切」と主張した。

宣言文では、「いのちを処分可能な所有物と考える見方に警鐘をならした」とまとめられた。

「少子高齢化」の部会も開かれ、釈徹宗・浄土真宗本願寺派如来寺住職を司会に3人が登壇。前野直樹・日本ムスリム協会理事は、イスラム教で寿がれるように、結婚や家庭を持つことが素晴らしいとの意識改革が必要だと訴えた。

國富敬二・WCRP日本委員会事務局長は「年を重ねることが嬉しくない社会はいかがなものか」と述べ、少子高齢化問題の捉え方について、長寿社会を喜ぶポジティブな現象として受け取る方向性を提案。そのために、高齢者が住みやすく社会参加しやすい富山市のコンパクトシティーのような取り組みを広げるべきだと主張した。さらに、2050年に自殺が死因の中で最上位になるとの予測を提示し、「人生の根本命題に向き合うとともに、弱者を守る社会をつくるために、宗教者は先頭に立たねばならない」と語った。

宣言文では、「出産や育児を望む人と長寿を祝福するとともに、異なった世代間が相互に尊重し合える社会にする」とした。

平和の祈りを込めて撞いた梵鐘

2019年(令和元年)6月20日　THE BUKKYO TIMES WEEKLY　週刊仏教タイムス

教界情報

立正佼成会

G20レセプション　庭野次代会長登壇

G20諸宗教フォーラムのレセプションが11日、京都市内のホテルで開かれ、国内外の諸宗教リーダーが出席した。司会の三宅善信・神道国際学会理事長かけて立正佼成会の庭野光祥次代会長が登壇し、「日本、世界の宗教者が集まっているG20諸宗教フォーラムの場に来させていただいたことを感謝している」と挨拶した（写真）。

「私は子育てが終わった後、海外で諸宗教対話のお役を頂くことが多い」と述べ、「日本にいると海外のニュースが非常に偏って語られ、欧州や中東でのニュースとの間に情報の開きがあると感じる」と指摘。「世界の諸宗教のリーダーが集まった時に、ぜひ（日本と海外の宗教者に）交流していただきたい」と語った。